

特集を終えて

2008年の土木学会誌新春号は、少なくとも二点に於いて一定の意味を持ち得るように思える。その一つは、長らく「横書き」であった学会誌が「縦書き」の雑誌となったという点にある。そしてもう一つは、新しい土木のかたちを、政治的観点、哲学的観点、美的観点、そして、日本近代土木の始祖たる古市先生の言説から見直したという点においてである。

学会誌の歴史の変遷を考えたとき、歴代の土木学会編集委員長の取材を通じて浮かび上がったのは、学会誌の歴史の中で最も重要な転機の一つが1956年の「土木学会論文集」の発刊であった、との事実であった。歴代編集委員長によれば、論文集発刊以前は学会誌が唯一の土木技術を発表する活字媒体であったと共に土木屋の教養と哲学を培う活字媒体であったとのことであった。しかし、「論文集」の発刊以降、「学会誌」は「土木技術者における哲学と教養を培う場」としての役割を重点的に担うべき存在となったのであった。その流れの中、学会誌は70年代に「特集」を重視した雑誌へと変化し、90年代にカラー頁を重視した雑誌へと変遷し、そして、2008年1月に「縦書き」の雑誌への変化を始めることとなったのである。

ここで重要なのは、この変化は、単なる文字方向の変化に留まるものではない、という点である。その変

化の根底には、土木屋なるもの「哲学と教養」を携えねばならぬとの構えがあり、そして、その構えは古市公威先生から高橋裕先生へ、そして現在の土木屋へと引き継がれた最も伝統的な土木的精神であるべきものである。そしてそうした精神を、「言葉」で表現するとするならば、我々の国語が日本語である以上は日本語が最も生き生きと躍動し得るフォルムを獲得せねばならぬ、だからこそ、数千年の永きにわたり縦書きで熟成されてきた日本語にて哲学と教養を語る以上は、その器は日本語の伝統である縦書きであるべきなのではないか——、との認識の下、土木学会誌は、いまここにおいて縦書きの器を得たのであった。

しかし、いかに良き器であったとしても、その内実がそれにそぐわぬ醜きものであったとするならばその器の意味は霧散せざるを得ぬであろう。良き器が真に美しくなり得るのは美しい内実が盛られた時に限られる。かくして、日本の内閣総理大臣を経験された歴々の中で現在最も高齢であり、かつ戦後日本を文字通り牽引してこられた中曾根先生、戦後日本と言論界において最も真性なる保守の思想をその人生を賭して展開しておられる西部先生、戦後日本の流れに多大なる影響を及ぼした経済学の内部に於いて経済に止まらず文化にまで視野を広めつつ論を展開しておられる宇沢先生、そして、戦後日

本において「美」を具現化し続けてこられたコシノ先生のお言葉を本誌に頂戴する必然性が浮かび上がり、本特集が企画されたのである。

無論、本会が志す土木が各先生方のお言葉にふさわしいものであるのか否かを断ずる資格を現土木学会は持たない。しかしながら、各先生方から頂戴したお言葉に恥じぬ会たり得ようとする努力をなすことができぬはずはなかる。だとするならば、

我々現土木学会員は、土木を、工学を、ひいては日本を評する後生の歴史家から否定的に揶揄されることが無きよう、日々努力を片時も怠つてはならぬのであろう。本特集において各界の先生方からお言葉を頂戴した本特集を終えるにあたり、その意をさらに強くした次第である。

いずれにしても、本特集にご協力いただいた各先生方のお言葉は、本会会員の各々に様々なる思いをもたらし得るものであることは疑いを入れぬところである。こうしたお言葉を土木学会、そして、土木のために綴っていただいた各先生方、ならびに関係各位に深い謝意を表しつつ、本特集を終えることとした。

(文責 土木学会誌編集委員会幹事長
2008年1月号特集主査 藤井 聡)